ニュースレター
かけはし
vol. 15
2013年5月
アメリカへの学位留学を支援する
米国大学院学生会

目次

寄稿:○○な話 (石松 拓人) 1-2
寄稿: 博士号取得後の就職について (真木 和彦) 3-4
寄稿: 経済学Ph.Dのアカデミア就職 (上武 康亮) 4-5
連載: アメリカ留学とインターンシップ (1) (片桐 範之) 6
寄稿: 草食留学 in カリフォルニア (西嶋 諒子) 7-8

寄稿:○○な話

Massachusetts Institute of Technology
石松 拓人

渡米して7年。もし僕が、最初の2年で留学を終えていれば、留学体験記という言葉にぴったりの寄稿をしていただろう。しかし、あとの5年は、そんなコンパクトな言葉に収めるには、あまりにも○○すぎた。この、○○にあたるよい言葉が思い付かないので、それはいっそのこと、みなさんそれぞれの語彙力にお任せしたいと思う。

「留学体験記」

宇宙への漠然とした憧れを持った、どこにでもいる少年が、ハリウッド映画を見て、宇宙といえばNASA、NASAに行くならMIT、という短絡的な図式をインプットされ、大学の同期が次々と就職を決めていく中、今!と思い立って、MITへ留学することに決めた。出発の準備は、渡米当日の朝、毛布とPCをスーツケースに詰めたくらい。頭は坊主にし、服は現地調達すればよいと考えた。決して立派な計画も公算もなく、いかだで海に躍り出た、ただの馬鹿だった。人並みに言葉や文化や気候や食と格闘し、RA探しはことごとく無視か門前払いかたらい回し。必死で単位を取りそろえ、運でQualsを突破し、下手くそな英語で何とか修士論文を書きおおせた。THE留学生活。

ここまでをつぶさに書き綴ったものが、僕の思う「留学体験記」だが、それは本紙や書籍やブログなどで、多くの方が書いてくださっているので、そちらを参照していただくとして、残りの紙面を、僕に提供できる、またひとつ別の「留学」に割きたいと思う。

「留学」のその後

最初の2年は幸いにも文科省の奨学金を頂くことができたが、行きがかり上、博士課程に進学することになり、やはりRAは必須となった。さもなくば、3年目から急に云百万円の学生ローンをすることになる。

2年目後半に取った授業で、修論の一部をプロジェクトにし、それが先生に好評だった。以前一度門前払いされた先生だったが、今度は授業で関係性を構築しているし、僕の研究内容や質を知っている。そこでもう一度話をしに行ったところ、彼はちょうどテニュア審査の結果が出る直前で「もし私がMITに残れたら君をNASAのプロジェクトで雇いたい」との返事をいただき、数週間後、彼はテニュアを得て、僕はRAを得た。こうして僕はどうにか3年目以降の「居場所」を確保した。

僕には東京の学部時代から付き合っていた彼女がいた。MITで修士を終える頃、交際6年(うち遠距離2年)になっていた。彼女は大学卒業後、某放送局に就職し、激務な毎日を送っていた。ボストンと東京はほぼ半日の時差があるので、東京の真夜中/ボストンの真昼間に、よく電話やスカイプをした。そしてRAが決まった2年目の夏、ボストンで婚約指輪を買い、日本に一時帰国してプロポーズをし、彼女の両親にご挨拶に行った。

結婚は一筋縄では行かなかった。彼女の両親が、結婚は時期尚早と難色を示したのだ。それももっともだった。僕はまだ「学生」だったのだ。とりわけ、田舎の両親にとって、マサチューセッツなんたらとかいう怪しい大学で、アールエーなる訳の分からない仕事をして、18万円ぽっち(ボーナス無し)の給料を貰う「学生」に、おいそ

れと娘をやるわけにはいかない。入籍する話は一時白紙に戻った。MITでは学生結婚は少なくなく、現に大学院生用の家族寮も2つほどあるが、日本における結婚は、就職してから考えることがほとんどだ。また、彼女の両親にしてみれば、たまの一時帰国のたびに急速に話を進めていく僕らのスピード感にも不安を覚えただろう。

話は戻って、僕のNASAのプロジェクトは1年で終わることになった。当時NASAの予算削減や大量解雇の流れの中にあって、契約が更新されなかったのだ。突然僕は仕事を失った。これがRAの怖いところだ。僕はRA探しを再開した。最悪学生ローンを組んで、急いで卒業して就職するか…と思い始めた頃、別の先生がJAXAとのプロジェクトを始める話を聞いた。自分の研究とは全く無関係の分野になるが、背に腹は変えられないと話をしに行き、その教授に雇ってもらえたのだった。ここでは割愛するが、その後さらにもう2つ別のRAを経て今に至る。

皮肉にもRA雇用の不安定さを自ら体現することになった時期に僕らは入籍した。当初の計画から遅れること1年、結局僕はまだ「学生」だったが、なし崩し的に僕らのわがままを通してもらう形になった。そして入籍からさらに1年を経て日本で挙式、その後すぐ妻(以後、妻)が妊娠した。実はこれが僕らの狙いだった。妻が妊娠すれば、まとまった期間会社をお休みすることになる。その間、東京の家を引き払って、ボストンで一緒に暮らすのが、僕らが「プランB」と呼んでいた裏技で、これが思いのほか早く実現することになった。

かくして妻は、妊娠7ヶ月で渡米した。今思えば妻は、妊娠も初めてな上に、外国の知らない土地で、英語もあまりわからない中出産をしろというのだから、勇気の要ることだったろう。言葉はできる限りサポートしたが、それでも初めて聞く医学用語ばかりの会話を僕が全部的確に通訳するのは不可能だった。妻は、自分の体のことなのに何を話しているかわからない、夫もイマイチ頼りない、ものすごくストレスフルな状態と戦っていた。

5月のはじめ、ボストンでは桜が満開になる季節に、娘は生まれた。アメリカではエピドラルという麻酔剤を打つ、いわゆる無痛分娩がポピュラーだが、僕らがかかった産院の方針なのか、妻は思いっきり陣痛を味わいつくした挙句、腰に太い注射針を刺された。いよいよ出産。僕ももちろん立ち会った、というより、僕も妻の片足を持ち上げて一緒にいきんだ。途中からは助産師さんが手を離し、僕と妻だけが分娩台の上でいきむという、想像だにしなかった出産だった。へその緒も僕が切った。日本ではおよそ考えられない光景だ。こうして無事に娘は生まれ、生活は一変した。

時間に融通の利く学生の間に子供を持つのは、とても幸せなことだ。「子供は3歳までに一生分の親孝行をする」と言われるが、おそらく僕は世のお父さんよりはるかにこの時期を堪能している。同時に、育児の大変さもよくわかったつもりだ。激務経験のある妻でさえ「仕事の方が楽」と言う。それくらい子育ては日々格闘で、それをいくらか自ら体験し理解できたことは、僕にとっても妻にとっても良かった。

妻は育休が終わり、今年1月から復職している。一方、僕は博士課程にようやく終わりが見え、6月卒業の目処が立っていたので一時的に単身赴任をすることになった。娘は妻と東京に住み、保育園へ通っている。可愛い盛りの娘との別居は、妻との遠距離とは桁違いに寂しいものだったが、このほど博士論文を書き上げ、ディフェンスを2週間後に控えた状態で一時帰国し、妻と娘と4ヶ月ぶりに再会、そして今この原稿を書いている。この記事がみなさんのもとに届く頃には、僕は無事に博士となっている(はずだ)。

他力

僕には、ひとりで何事かを成し遂げる才能も意欲もない。頭の回転は遅い、計画性はない、論理思考は苦手、人脈を広げていくコミュニケーションも下手。それでも僕がのらりくらりとここまで来れたのは、他力のおかげだ。アメリカのトップスクールはライバルがひしめき合う競争の場であり、厳しい勝負の場だ、という見方もあるが、僕は真逆で、全ての人は味方であり、無敵とは文字通り敵がいないことだと思っている。

僕の留学に一貫性や主体性はない。新しい仲間やプロジェクトを転々として今に至る。何もない宇宙にノープランで飛び出て、ゆっくりゆっくり飛行し、偶然巡り合った惑星をスイングバイして、まだ見ぬ出会いへと舵を切り、また何もない宇宙をゆっくりゆっくり飛行する。僕の「留学」は最初の2年で終わり、それから後は、僕がどこにいてもしたであろう、新しい出会い、生活費の工面、結婚と出産と育児、それらをただMITという場所で積み重ねていっただけだった。

ここまで読んでいただいて、冒頭の○○にぴったりな言葉が、みなさんの頭の中に浮かぶだろうか。もし浮かんでいれば、それを埋めていただいて、この寄稿文は完成となる。

「ケネディ宇宙センター」

娘が生まれて、生活は一変。何をするにも、どこに行くにも、娘が最優先。主役は完全に取って代わった。それでも、学会旅行などで国内外引っ張りまわした。写真はフロリダのケネディ宇宙センターにて、最後のスペースシャトルの打ち上げを待っているとき。生後2ヶ月の娘は打ち上げの轟音と歓声の中ぐっすり眠っていた。

石松 拓人
Massachusetts Institute of Technology
Department of Aeronautics and Astronautics
Doctoral Program

寄稿:博士号取得後の就職について

Wayne State University
真木 和彦

私は2004年の秋から、ウィスコンシン大学マディソン校統計学科博士課程に留学しました。博士課程への留学というと知的な探求の側面ばかりが取り上げられがちですが、それと並んで一番大事な事は修了後に満足な仕事が得られるかどうかということでしょう 。 米国の大学院が世界中から優秀な学生を集める事ができるのも、修了後に米国で魅力的な仕事を得られる可能性が高いからです。そこで、2009年秋からの就職に向けて活動した経験をもとに、米国での就職活動について書いてみます。米国での就職事情は分野による違いが大きいですが、その点を考慮した上で共通した慣習を感じ取って頂ければと思います。

選考プロセス

米国の求人における選考は、書類選考、電話インタビュー、現地での選考の3段階を経て決まることが多いようです。

まず書類選考ですが、日本との違いの一つは応募書類がかなり標準化されていることです。応募先毎にエッセイを書かなければいけないようなことは稀で、例えば大学の研究と教育を兼ねたポジションの場合には、 レジュメから研究計画に至るまで基本的には同じ書類を全ての大学に送付することになります。 こうしたことから、一つのポジションに非常にたくさんの応募があるのが普通で、例えば有名大学の数学科では2名程度の募集に対し1000人近い応募があるといったことも起ります。逆に言えば、応募する側も非常にたくさんのポジションに同時に応募するということです。私は米国外も含め75件に応募しましたが、競争の激しい分野の知り合いは500件に応募したそうです。どうやってそんなにたくさんのポジションを選ぶのでしょうか。Carnegie FoundationやAAUP (米国大学教員組合)などのサイトを見ると、大学を分類したデータベースがあります。私はこうした情報を元に、分野が合致するポジションのうち、研究大学に該当する全ての大学に応募しました。

多数の応募は大変な面もありますが、逆に言うと短期間のうちにたくさんの職に応募する事ができて早く仕事を決められ、仮にだめだったとしても早く諦めをつけて他の事に挑戦できる、という良い面もあります。米国における専門職の求人市場の規模と流動性が圧倒的に大きいために、このような事が可能になるのです。

求人側は、多くの応募者の中から10人程度を選抜して電話インタビューを行います。これは、応募者がどんな人間であるのか、募集しているポジションに合っているかどうかを見極めるのが目的です。また、ネイティブスピーカーでない場合は、英語力を見極めるという側面もあるようです。私は約10件の電話面接を受けましたが、難しいと感じたのは相手が複数いる電話会議形式でのインタビューでした。相手側の雰囲気が伝わらず、どういった答えを期待しているのかが分からないからです。

電話インタビューを通過すると現地に呼ばれて本格的な選考が行われます。一名の募集であれば1人ずつ3～4人の候補者が呼ばれることが多いようです。この「フライアウト」と呼ばれる最終選考は1～2泊程度の日程で行われ、関係者との食事、様々な人との一対一での面談、プレゼンテーションなどが行われます。朝から夜の食事までフルアテンドで行われますので、普通の日本人にとっては相当に大変です。一つは英語の問題です。英語の要求水準は分野や職種によって異なりますが、フライアウトは英語の運用試験を一日中、休みなしで行う様なものです。もう一つは、 日本人は気を遣いすぎる人が多いという問題です。リラックスして選考に臨むということを身につけることも大事なのでしょう。私はフライアウトの日程を決める際、飛行機の遅延などを気にして余裕のある日程を組んだのですが、このような事情を考えるとむしろ短めにした方が好ましいのかもしれません。飛行機の遅延は日常茶飯事なので極端な心配は不要ですし、ホスト側にとっても日程が短い方が楽だからです。

選考スケジュール

企業のポジションの場合には一年中募集が出ますが、大学の教育を兼ねたポジションの場合は9月からの開始に合わせて募集されるため、選考時期も自ずと決まってきます。早い大学では7月頃から遅い大学でも12月頃には、翌年秋からのポジションの募集が出ます。私は、11月中旬頃には書類を揃えて応募を始めました。その後、電話インタビューが12月中旬から2月にかけて、そしてフライアウトが1月から3月にかけてという感じです。オファーは全ての候補者の面接が終わった直後、早ければ2月上旬から出ますが、補欠になった場合には延々と待たされるため精神的にかなり参りました。一方、大学側も次々とオファーを蹴られることがあり、3月下旬にもなれば応募者と大学の双方が焦りはじめて混沌としてきます。結局、私が今いる大学からオファーを貰えたのは4月に入ってからでした。オファーをもらったら、まず、応募している他のポジションの結果を催促すると良いでしょう。複数のオファーがあると、求人側が条件の上積みをしてくれることがあるからです。

ジョブフェア

私の専攻分野である統計学は、例年、関連学会に付随してジョブフェアが開かれ、多くの企業や大学が参加しています。国土が広く就職活動の移動が大変な中で、ジョブフェアでは多くの企業や大学と短期間のうちに接することができるので便利です。このジョブフェアは、いわば電話インタビューを置き換えるものと考えると分かりやすいでしょう。従って、選考に残れば最終的には現地に赴かなければならないのですが、電話の代わりに採用担当者と直接話ができるというのは大きなメリットです。参加する学会でジョブ

フェアが開催されていたら行ってみて損はないでしょう。

大学の求人に関する日米の違い

私は留学当時、博士取得後に米国で仕事をすることはほとんど考えておらず、日本で仕事を探すつもりでした。 にもかかわらず米国で働くことになった一つの理由は、日米における博士取得見込み者の扱いの違いです。一般に、日本の大学では選考の際に実績を重視するのに対し、米国の大学ではポテンシャルを重視することが多いようです。日本では、博士取得済みの応募者が取得見込みの人 に比べて有利なようですし、論文に関しても掲載済みの実績が重視されるようです。一方、米国では博士論文の内容に可能性を見出して採用するという面が大きいため、取得見込み者には相対的に有利なのでしょう。

米国で働くということ

フルタイムの仕事に就いている人のことを社会人と言い表すことからも分かるように、働いてみて初めてその国の社会のことがよく分かると言っても過言ではありません。私も、経済的なことや社会保障制度のこと、組織での人間関係、教育や住環境のことなど、様々なことを考えるようになりました。留学すると視野が広がるなどと言われますが、現地の組織で働いてみればその視野はずっと大きく広がります。特にSTEM（科学技術）分野では人材不足から、米国の大学院を卒業した外国人が仕事を得やすいという利点もあります。そうした選択肢があるのは米国大学院留学の最大の利点の一つなのですから、卒業後の仕事が決まっていない方は、ぜひ米国での就職も検討してみて下さい。

この写真で日米社会を比較するブログを書いています。
興味のある人は探してみて下さい。

数学科の教員は今流行りのノマドワーカー。地球環境の保護（＝ガソリン節約）を大義名分に、授業のない日や夏休みは自宅近くのカフェで仕事をします（娘撮影）。

真木 和彦
Ph.D in Statistics, University of Wisconsin-Madison
Assistant Professor, Department of Mathematics, Wayne State University

寄稿：経済学Ph.Dのアカデミア就職

Northwestern University
上武 康亮

僕は、ノースウェスタン大学経済学部の博士課程(Ph.D)に在籍しており、今年の6月に卒業を控えている。卒業後は、イェール大学ビジネススクールで助教授として働くことになっている。今回は、僕自身の体験を交えつつ、経済学Ph.Dの就職活動について書きたいと思う。これから留学をする人、留学をしたいと考えている人にとって、Ph.D取得後の事を想像するのはなかなか難しいと思われるが、どのような選択肢があるのかを留学前に具体的に念頭に置いて準備をしていくことは重要だと思われる。

まず初めに、米国はPh.Dに対する社会的な評価はとても高く、卒業後は大学に限らず様々な選択肢がある。僕の知り合いにも、理系のPh.Dを取得後コンサルなどに就職した人が何人もいる。経済学の場合には大学等の研究機関、IMFや世界銀行等の国際機関、コンサル、投資銀行等が主な就職先であり、最近ではAmazonやGoogleなどのインターネット関連の企業からの募集も急速に増えている。米国ではPh.Dを持たずしてその道の専門家とは見なされないため、国際機関等での就職にはPh.Dは必須である。

経済学における就職活動(通称ジョブマーケット)はかなりシステム化されており、ほぼ全てのキャンディデイトがほぼ同じプロセスを経て仕事を見つけることになる。以下では、時系列に沿って話を進めて行きたいと思う。

経済学のジョブマーケットは卒業する前年の秋学期から本格化する。秋口になるとアメリカ経済学会(AEA)のウェブページに世界中の大学、研究機関、一般企業からの求人募集が一斉にアップされる。この中から自分の希望に見合う応募先を選んでいくわけだが、近年ではほとんどの応募をオンラインでできる事もあって、平均で100くらいの応募をするようである。僕も、北米、ヨーロッパ、アジアの大学を中心に130校ほどに応募をした。ちなみに、日本の大学は異なるシステムで動いており、北米を中心とするマーケットには一部の大学を除いて募集をあまりかけていないようである。僕のジョブマーケットペーパーはベンチャーキャピタル市場の

競争を分析したもので、実証産業組織論と呼ばれる分野のセミナーで発表をした。前述のようにセミナー発表は、とても重要なのだが、僕は直前まで分析の間違いをなおしたりしていたせいで発表の準備に時間をかけられず、発表はお世辞にも成功とは言えない物だった。最近指導教官から、発表の直後にはこの発表では就職先が見つかるか相当心配だったと言われました(笑)

応募とセミナー発表が一段楽する頃には感謝祭を迎えており、1週間の束の間の休息の後、学生たちはギアを一段階あげなければならない。休暇明けから書類審査を通過した大学から面接の通知が届くのである。これらの面接は、毎年1月に開かれるAEAの年次総会会場(今年はSan Diego)において学会と同時並行で行われる。学会会場周辺のホテルに各大学が面接用の部屋を設けており、学生はそのホテルの部屋を訪れて面接を受ける。世界中の大学から人が集まるので、そこで一斉に面接をしてしまおうという極めて効率的な方法である。僕は幸いにも、25の大学、研究機関から面接の予定が入れることができた。セミナー発表が失敗したにも関わらずこれだけ面接を受けることができたのは指導教官の助けのおかげだと思っている。ちなみに内訳としては、米国の大学が15校、カナダの大学が3校、米国の民間企業、政府機関が4つ、日本の大学が3校という具合だった。

面接会場のホテルでの様子

部屋の前で順番を待つスーツを来た学生たちを見る事ができる。

面接は学会会場のホテルの一室で行われる。各部屋に各大学の先生方が待機しており、アポイントメントを取って面接を行う。この面接に通れば、キャンパスビジットを行う（通称：「フライアウト」）。その後ようやく大学側からオファーが来るシステムとなっている。

面接は、特に英語が得意ではない僕にとってとても大変だった。普段学生が話す相手は指導教官や気心の知れた友人たちであり、彼らは僕のようなつたない英語でも行間を読んでくれ、言葉を超えてコミュニケーションを取ることが出来るが、インタビューでは初めて会う人たちと、30分ほどの限られた時間の中で、ジョブマーケットペーパーやそのほかの研究について伝えなければならず、それまでとは全く違うコミュニケーション能力が問われるのである。特に、北米の大学ではアメリカ人的なコミュニケーション能力が求められ、5人、6人いる面接官が次から次へと質問をしてくる中で自分の能力を積極的に売り込んでいかなければならないので、特にアジア出身の学生にとっては難しいと言われている。僕も、とても苦労しましたが、友人たちに多大に助けてもらったおかげで、1ヶ月の練習後にはなんとか形にはすることができた。12月は、毎日面接の練習、録音を繰り返し、なるべく自然に聞こえるように心がけた。

クリスマス休暇を経て、1月2日から学会会場のSan Diegoに移動した。実際に学会が始まってからは、初日を除き一日10個近くの面接を3日間こなし、毎日ご飯も喉を通らないほど疲労困憊した。体力勝負と聞いていたが、それは本当だったと思う。最初の数個の面接は緊張から言葉がうまく出てこずに戸惑ったが、それ以降は練習の甲斐もあり、楽しみながらやることができたと思う。

AEAにおける面接の後に待っているのが、ジョブマーケットの最終段階かつ最大の山場であるフライアウトである。面接で気に入ってもらえた各大学に実際にキャンパスビジットをするわけである。キャンパスビジットでは、1日に10人近くの教授たちと面接をし、ジョブマーケットペーパーの発表をこなし、最後に夕食を一緒にするというハードスケジュールである。

セミナーでは、将来の同僚を選ぶということもあり、聴衆も通常のセミナーよりも厳しい質問をぶつけて、その反応を見るということが多く、時に意地悪な質問をかわしつつ自分のペースで発表を進めるのは、面接とは違いまた難しいものだった。僕は6校の大学からフライアウトをもらうことができたが、最初のほうの発表ではうまく質問に答えられずに苦労した。

以上が、経済学Ph.Dのジョブマーケットの概要である。フライアウトの後、各大学で投票が行われて誰に実際にオファーを出すのかを決めるのだが、一般的に面接からフライアウトにつながるのが1/3、フライアウトからオファーにつながるのが1/3と言われている。僕の場合も、最終的に二つの大学からオファーをもらうことが出来た。どちらの大学もとても魅力的だったのだが、総合的に判断して最終的にイェール大学のオファーを受けることにした。

半年近くに及ぶジョブマーケットは精神的にも肉体的にもとても疲れましたが、振り返るととてもいい経験だったと思う。数多くの人が真剣に自分の研究の話を聞いてくれ、議論をしてくれる機会はそう多くはありませんし、ジョブマーケットを通じて知り合った研究者とその後学会などで再会して研究の話をするなど、ネットワークを広げるという意味でもとても有意義であった。また、今後さまざまな場面で必要となってくるコミュニケーション能力を学ぶという意味でも、大きな意味があったと思う。

分野によって就職活動のプロセスは大きく異なると思われるが、少しでも雰囲気が伝わり、参考になれば幸いである。

上武 康亮
Ph.D candidate in Economics
Northwestern University

連載: アメリカ留学とインターンシップ
(1) インターンシップを通じてアメリカと国際政治を学ぶ

Air War College, United States Air Force
片桐 範之

去年の4月号で私は、アメリカの政治学部での留学と就職活動について書きました。今回は主に政治学を学ぶ文系の留学生が、アメリカ滞在中にインターンシップや研究職に就くことがどう将来にいかせるかについて書きたいと思います。私の専門が政治学なのでその方面の方に最も関係しますが、基本的に文系全体に当てはまると思います。

私は在学中にニューヨークの国連本部、ワシントンのヘリテージ財団、防衛情報センター、ブルッキングス研究所などでインターンシップを、そして博士課程のときにランド研究所で有期の研究職に就きました。博士号を終えるとそのままアメリカ空軍の戦争大学(Air War College, United States Air Force)に就職し、今に至ります。

まず重要なのは、インターンシップはお金を稼ぐ機会というよりも、安い給料と引き換えに経験、人脈、ネットワーク、そして新しい研究材料や情報へのアクセスを得ることで今後の自分のキャリアに生かす機会であるという点を認識することです。また、留学生にとってはアメリカ政治や国際関係を学ぶ意味で大きな機会にもなります。ワシントンを中心に大都市に位置する研究機関や財団で現実社会を学ぶ素晴らしい機会になります。自分のレジュメを強化させたい方、もしくは大学院に進学する前にある種の「社会経験」を得ておきたいと思う方にも良い機会だと思います。更には、アメリカで就職先を探す際にも、雇用主側の視点では一定の社会経験がある人間をより真剣に考慮する可能性もあります。

私の場合は政治的イデオロギーが全く違う研究所にも所属し多くを学びました。前述のヘリテージ財団は誰もが認める保守派のシンクタンクである一方、防衛情報センターやブルッキングス研究所には内部で働く個人の違いはありますが、比較的リベラルな思想を元に研究を推奨しています。様々な場所で働くことになったのはワシントンのシンクタンクのインターンシップを得るのがあまりにも大変だったためです。必ずしも自分が願っていた場所での仕事ではありませんでしたが、今から思えば、全く逆の思想を持つ研究所で働くことにより、アメリカ政治の端から端までその経験を通じて理解できたため、自分にとってはとても良い経験になりました。

自身の経験からありとあらゆる手段を用いてインターンシップを手に入れることが大切であると私は考えます。ではどのようにしてインターンシップを得るのか。通常は各々の研究所のウェブサイトを通しネットもしくはメールで直接申し込むのが一般ですが、指導教官の個人的なネットワークや大学のカリキュラムの一貫として参加することも可能です。また、研究所側にとってはできるだけ既に現地にいる人間を優遇する傾向があります。従って遠方から探している場合は、その不利を克服するために予め面接のアポを取り、直接現地に乗り込み、面接では自分を強くアピールします。当時ニューヨークで学生をしていた私はワシントンにあるヘリテージ財団での機会をそうして手に入れました。

どのようにしてインターン先を選ぶかに関しては、もちろん自分の専攻と学問的興味、そして将来の希望に従い、調査する必要があります。一番手っ取り早いのは、戦略国際問題研究所(Center for Strategic and International Studies, CSIS)など、日本との関係についての研究が既に充実している研究所のプログラムの関係者とコネを作り雇ってもらうことです。ただほとんどの留学生はそのような機会には恵まれません。ワシントンにあるインターンシップ先として誰もが夢見るのがCSISと外交問題評議会、そしてブルッキングス研究所なのですが、私も何度も応募し失敗し、最終的にやっとブルッキングスにたどり着いたという感があります。インターンシップの応募は競争率が激しいため、ほとんどの場合は失敗します。

仮に成功し仕事を始める場合も、それ自体では経済的な自立は難しく、インターンシップ中でも大変な生活を強いられます。スーツをビシッと着こなし一見エリートに見えるワシントンのインターンも恵まれている場合は実は多くはありません。最初は多くの人が知らないような場所で働き、諦めず努力をし、色々な経験をし、同じ境遇である同年代の友人を作り情報を交換し、少しずつ人間として成長しながら大きな機会と場所を得ていくのです。いずれにせよ、ここで重要なのは前述のように、インターンシップとは安い給料と引き換えに経験、ネットワーク、そしてアクセスを得、今後の自分のキャリアに生かす機会である、という側面です。

片桐 範之
Assistant Professor
Department of International Security Studies
Air War College, United States Air Force

※ここにある見解は私個人のものであり、必ずしもアメリカ政府、国防総省、もしくはアメリカ空軍戦争大学の政策を反映するものではございません。

寄稿: 草食留学 in カリフォルニア

University of California, Los Angeles
西嶋 諒子

Where the grass is really greener

いきなりケイティペリーの引用[1]というチャチな出だしもどうかと思ったのですが、7年目となる米国西海岸の生活を総括するにあたり、実は意外にも的を射たフレーズであるような気がします。比喩的に、また文字通りにも、カリフォルニアの芝は本当に青かったのでした。

高校時代からハリウッド映画に夢中だった私は、「カリフォルニア」と呼ばれる場所に大きな憧れを抱いていました。スクリーンに散りばめられたイメージのかけらをかき集め勝手に作り上げた空想上のアメリカ像に過ぎないのですが、そんな所へ行きたい、というただのミーハー心が米国の大学に出願する原動力となりました。難しいTOEFL単語も「あのシーンでジョニーデップが使ってた!」というマニアックな暗記法でなんとかクリア。ベイエリアにあるスタンフォード大学から合格通知が届いた日の興奮は今でも覚えています。

ところで、この類の話には「幻滅」というオチがつきもの。アメリカンドリームと現実との乖離に落胆した人々が“Grass is always greener on the other side”とため息交じりに呟くのはよくある光景です。しかし私の場合、この土地に抱いたイリュージョンのようなものは、渡米後も不思議と消える事はありませんでした。もちろん勉強に追われる慌ただしい毎日の繰り返しは、ハリウッドが映し出すカラフルな世界とは少し異なっています。それでも、夕暮れ時のハイウェイがふと映画のワンシーンのように映ったり、友人の話すスラングが好きだった台詞と重なったり、何かの拍子に現実とフィクションが絶妙な掛け合いをする時、つまらない日常が一瞬物語性を帯び、「あの頃日本で見ていたアメリカ」に今暮らせる喜びを実感するのでした。ひとえに私の妄想力の成せる業かもしれませんが、こうしてここでの生活はいつまでも私を魅了し続けます。

現実と物語の狭間をさまよっていた私にとって、人類学という学問は性に合っていたようです。アルフレッド・クローバーは「人類学は社会科学の中で最も人間的であり、人文学の中で最も科学的な学問だ」と定義しました。想像、夢、記憶といった人間的な創作と、実在する現実世界の間を探索するにはもってこいの学部だったのです。

リベラルアーツの醍醐味

文化人類学の授業を初めてとったのは、大学一年次教養科目の中から選択したVisions of Mortalityという「死」に関する授業でした。哲学・人類学の両面から死について考えようというコースで、前半は哲学者が死をどう説いたか、後半は世界中の死にまつわる儀式や安楽死に関する倫理感など人類学的な観点で進められました。英語は得意な方でしたが、それでもいきなりニーチェの死生観をアメリカ人と議論し合い論文にしたためるレベルには到底及びませんでした。「ディスカッションについて行けず茫然と過ごす」というほろ苦い思いは日本人がアメリカに留学する際必ず経験する一種の通過儀礼の如くなっているようで、私もこの授業で身をもって体験しました。ただ漠然と「『死』一つとっても世界中に様々な考えが存在するんだなぁ」という事に興味を持ったのが人類学に対する第一印象でした。

時は過ぎて三年の夏。私が台湾でフィールドワークをしていた頃、人類学専攻の同級生は地球の隅々で実に様々な研究をしていました。ある子はサッカーと民主主義について、別の子はジェンダーの視点から韓流人気を分析、さらにはボツワナのNGO活動やパキスタンの病院で乳癌患者の研究、等々…。なんでもアリな研究テーマこそ文化人類学の醍醐味だとこの頃から強く感じるようになりました。リベラルアーツ教育で身についた幅広い見識は、その後いかなる進路にも柔軟に対応できる教養の土台となります。ブラジルとイギリスを飛び回りフーリガンに囲まれサッカー観戦をしていた、どう見ても「遊んでんのか?!」という夏を過ごしていた彼はハーバードの医学部に、中国の片田舎で韓国ドラマを見ていた彼女はエール大学のロースクールへ、輝かしい道へそれぞれ進んで行きました。

UCLAでは毎週トークセミナーが開かれており、第一線で活躍する文化人類学者に講演していただく機会に恵まれているのですが、彼らの研究内容もやはり多岐に渡っています。ある週はケニアの電子マネーについて、次の週は香港の空気、また別の週はベイルート近郊のカフェに集うイスラムの若者たち。色鮮やかなトピックは聞いているだけでとても面白く、飽きる事がありません。肩を並べる大学院生も強烈なキャラばかり。とある言語人類学者の卵は、どこからどう見てもアメリカ人なのですが、「トウホクベンヲマモリタイ!」と熱く語りながら盛岡でフィールドワークをしています(ちなみに彼は「徒然草」をバイブルとしているらしく、何かにつけて唐突に吉田兼好の引用を始めます)。皆思い思いの場所で好き勝手な事をやり、とにかく面白い話が聞ける環境にあるという意味では最高の学部です。

逃げる草食留学

「積極的ですね。行動力ありますね!」日本の高校を卒業後アメリカの大学へ留学し、中国へ交換留学、その後東南アジアでの生活を経て大学院留学に至った経緯を説明するとよくこう言われます。日本の内向き志向、若者の草食化が懸念されて久しい昨今、どうも海外留学は肉食の象徴のように扱われてしまうようです。世界を股にかけ海外に飛び出す元気いっぱいの若者—そんなイメージとは正反対の私が自分の留学生活を振り返りつくづく思うのは、こんな人でも留学していいんです!という事。

1. Katy Perry “California Girls” (2010) より

競争嫌いで消極的、そんな私は常に「逃げ」の姿勢で人生を送ってきたような気がします。福岡の進学校に通っていた私が大学留学を決心したのは、とても日本の受験戦争に勝ち残る自信が無かったから。大学でディスカッションのスピードについて行けなくなると「ネイティブじゃないし〜アメリカ人に敵うはずがない」と負け惜しみ半分に開き直り、漢字のアドバンテージがあった中国語に逃げる。卒業後はなんとなく就職を試みましたが、こんな受け身な態度のためことごとく門前払い。そのまま現実世界を避けるべくタイに逃亡。片田舎の中学校で英語教師として楽しく過ごしたのは良いけれど、「ずっと続ける訳にも…」とこれまた消極的な理由からフラフラ大学院を受験し今に至っています。

こうして見ると、完全に負のエネルギーに押されてここまで来ているのですが、今となってはどれも納得できる選択ばかりです。楽観的なのか酸っぱいブドウというのか。就活で背伸びして内定を勝ち取っていたとしても、気疲れする毎日を過ごしていたかもしれません。現実逃避に始まったタイ生活も「坊っちゃん」並みに面白エピソード満載の経験となりました。流れついた大学院留学ですが、数年後やって良かったと思えるようになる…かな？今はまだ何とも言えませんが、スティーブ・ジョブズの言葉でいつも自分を納得させています。“You can’t connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards. So you have to trust that the dots will somehow connect in your future.”[2]

なにも私のように受け身になれという訳ではありません。要は、留学とは欲しい獲物を追いかけるためだけの物ではないという事。何かから全速力で逃げる事は、また別の道に導かれるように走って行く事でもあるのではないでしょうか。草食動物が逃げて逃げて、最終的にたどり着いた先が「留学」というのも、これはこれでアリだと思うのです。

2. Steve Jobs’ 2005 Stanford Commencement Address (http://www.youtube.com/watch?v=UF8uR6Z6KLc)

西嶋 諒子
Ph.D candidate in Anthropology
University of California, Los Angeles

米国大学院学生会 http://gakuiryugaku.net/

【ニュースレター編集部】

原 健太郎　石原 圭祐　高野 陽平
山田 亜紀　辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。http://www.facebook.com/gakuiryugaku
こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

石の上にも3年、3年間で15号ニュースレターを出版致しました。おかげさまでFacebookで前号を閲覧していただいた方が2500以上でした。当会ウェブサイトもニュースレター発行直後1,2週間はアクセス数が倍増します。もちろん留学を希望する人・興味ある人にとって有意義なものになってほしいと願っていますが、そうでなく普通の読み物としていろんな分野のいろんな人がいろんな思いを持っていることが本ニュースレターの面白みかなと思います。もしご意見やご提案あれば、お気軽に上述のメールアドレスにメールを送って頂けると幸いです。(原)

今学期はとにかく目紛しい学期でした。まずQualifing Examという候補試験を受け、その後博士論文のプロポーザルを提出し、口頭試験を受けるという流れで、多くの事を一気にしなければいけない学期でした。来学期からはいよいよ社会科学系ならではの方法論であるフィールドリサーチを行い、データ集めに集中する段階に入ります。またこの内容はニュースレターでお伝えできればと思います。(山田)

早いもので米国大学院学生会にニュースレター班として参加して1年ほど経過しました。1年前といえばちょうど新しい環境に引っ越して間もない頃で、思えばこの1年の間で学生会活動も含めて密度の濃い貴重な経験をさせていただきました。特に大学院での研究活動やニュースレターの編集を通して”書く、伝える”ことを考えさせられました。まだ、まだ学ぶ事は多いですが、原の編集後記にもありますようにニュースレターを通していろいろな人の思いや経験を少しでも多くの方にお伝えすることができればと思います。

今年の夏は北海道大学での海外大学院説明会へ参加しますので、会場でニュースレターの読者の方々の生の声をお聞かせいただければ幸いです。ぜひ声をかけてください。(高野)